



フェリス女学院大学カリキュラムに関するアンケート及びヒアリング調査について

■実施日

事前アンケート：2023年9月12日（火）～29日（金）

ヒアリング：2023年11月13日（月）、17日（金）

■実施企業・団体数

6企業・団体

■実施目的

本学の教育活動や学生の学修成果について学外の方の考えをお聞きし、教育効果の向上を図ること。

■実施形式

事前にアンケート調査した内容を元にオンラインでヒアリングを実施

■ヒアリング内容

授業の一環として行うインターンシップ科目に関して学修成果の検証および今後の教育改善につながるため、就職先企業等の立場から率直な意見を伺った。

<事前アンケート設問項目>

設問1. 企業での就業体験前後にどのようなプログラムを実施すると、就業体験そのものの学びが深まると思いますか？

設問2. 企業での就業体験期間として、どの程度がふさわしいと思いますか？

設問3. 低学年時（1-2年生）にインターンシップに参加することは、高学年時（3-4年生）の参加と比較して、学習効果や学生の職業観の醸成にどのような違いがあると思われますか？

■結果

今回の事前アンケート及びヒアリングを通して以下の3つについて今後の改善つながる気付きがあった。

1. 事前の企業研究について

各企業・団体からのご意見（抜粋）

- ・就業体験を実施する目的の明確化（何を体験する（したい）、学びたいかを事前に設定する）が必要。
- ・過去にインターンシップに行った先輩の話聞く機会を設けたり、就業先の企業についての調べ方や業界に関する知識を持つ方法、又は予め収集して、まとめておくことができれば



ばより良い就業体験に繋がる。

- ・就業先企業の調査・研究を行い、就業体験を通じて何を学びたいか等のねらいを明確にする。
- ・実習前となる企業に第三者（お客様）として足を運んでみる。違う視点から実習先を見ることは重要である。

本学としての気づき

各企業、団体からヒアリングを行った結果、共通してインターンシップ参加前に企業研究をすることで学びが深まると回答があった。

就職課ではこれまでもインターンシップ前に公式サイトを確認して企業研究するよう指導してきた。しかし今回のヒアリングでは企業の業界や業種によって企業研究の仕方や程度が違うことを知ることができた。それは業界やグループ企業の中での立場を知る、お客として訪問できる実習先であれば実際に訪問する、地域に根差した事業を行う団体であれば実際に足を運んで地域の雰囲気を感じる等があげられた。実習先の企業研究については早速、今年度春季インターンシップ授業の事前研修課題として取り入れることができた。

2. インターンシップの日数について

各企業・団体からのご意見（抜粋）

- ・最低でも5日程度。10日間であれば職場環境や社員にも慣れ、仕事や業界について十分に理解できる。
- ・1か月間の仕事の流れがしっかり身につくような日程。
- ・学生目線では1日～5日程度が望ましいと思うが、企業側の受入れ体制としては1日程度が妥当である。

本学としての気づき

インターンシップについては2023年度の三省合意によって、より就業体験を意識したプログラムに変更となった。各人事担当者とのヒアリングでは、ある程度期間を設けたインターンシップの実施が理想だがマンパワー不足により1日で実施できるオープンカンパニーを実施しているとの声が多かった。学生が就業体験する機会を増やすためにも、大学が企業と連携して担当者の負担と理想とのギャップを埋める取り組みや、教育目的での長期インターンシップ受入先開拓をしていく必要があると考える。

3. 参加年次による学習効果の違いについて

各企業・団体からのご意見（抜粋）

- ・参加年次による学習効果の違いは無い。
学年に関わらず、事前に就業体験先の業務に係る専門講義などがあれば、インプットした知識をアウトプットすることで経験を深め、学習効果を高めることができる。
- ・職業観の醸成は低学年時と比較し、高学年時では大きく影響を与える。



- ・低学年での参加は早くから就業意識を持ってもらう点にはおいては有効である。
- ・実習に参加したことで学ぶ意欲の向上が図れる。一方で、就職への意識は圧倒的に高学年の方が高いため、低学年の実習に対する意識がやや低いと感ずることがある。
- ・高学年時に参加する場合、志望先の業界や企業がある程度固まっている場合が多く、低学年時の場合にはまだそれほど固まっていない場合が多い。高学年時に比べて広い視野や自由な視点で参加できる可能性が高い。
- ・低学年でも、意欲のある学生であれば、参加することで、就活時の会社や職業選びの指針になる。ただ、学校からの指示や、単位のためだけ等の理由であれば、職業観の熟成とはいかない。

本学としての気づき

各企業、団体ともに低学年や高学年の学生であってもインターンシップに参加することには意義があり、学びにその差は無いという回答は共通していた。しかし、高学年の学生は就職を意識しているためか、積極的にコミュニケーションをとる姿勢がある。一方で、低学年の学生は受け身の学生が多い印象とのことだった。

学年に応じてインターンシップのプログラムを分けている企業・団体は数少ない。そのため本学としては、特に低学年に対して、就業体験の意義や事前の企業研究の重要性を伝える取り組みも必要であり、対応を講じていきたい。

以上